

駒澤書翰



第12号

発行日：
2024年1月21日
発行所：
株式会社エヌワイケー
〒154-0012
世田谷区駒沢5-7-6
電話：
03-3704-8391
FAX：
03-3703-7121
発行人：
横山和俊

―挨拶― お見舞い―

厳寒の候、皆様におかれましては益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。日頃は弊社取扱い各紙をご愛読いただき誠にありがとうございます。スタッフ一同、引き続き迅速丁寧な配達業務を心がけていきます。本年もよろしくお願い致します。

さて、年明け間もない元日の午後、最大震度を観測する大地震が石川県能登半島をおそいました。東京で新年を迎えていた私も揺れを感じテレビをつけたところ、津波を警告するアナウンサーの悲痛な叫び声と、立て続けに起こる余震の速報を目の当たりにしました。私は2010年から8年間、石川県金沢市で勤務していました。石川県には多数の知人友人がいます。幸い金沢市内は能登半島から距離があるため大きな被害は出ていないようですが、スーパーやコンビニでは水やお弁当などの商品は店頭には並んでないそうです。金沢勤務時代は、長男が小学生だったこともあり自然豊かな能登半島には本当にたくさん遊びにいきました。火災で甚大な被害が出た輪島の朝市にも行きました。七尾湾に浮かぶ能登島には夏はキャンプ、冬は魚釣りと年中でかけていました。志賀原発のやや北にある北前船の寄港だった福浦漁港は風光明媚な港で、家族総出でよく魚釣りをしに行きました。ここでは書ききれないほどお世話になった人々、場所のことが思い出され胸が苦しくなります。「くなられた方々へのご冥福と、被災されたすべての方にお見舞い申し上げます」とも、「一日も早い安寧の日々が訪れることを願ってやみません」。

所長のひとこと ―新年を迎えるにあたって―

お世話になります、所長の横山です。「所長のひとり言」のコーナーでは、私が日々新聞を読む中で気になった記事を紹介しています。新聞は一覧性に優れた媒体ですが、たまには読み飛ばしをしてみることがあります。「そんな記事があったんだ」など、日々の閲覧の一助になれば幸いです。

能登半島地震など年初早々痛ましい出来事が続き気になるニュースも多々ありますが、2024年最初の駒澤書翰です。今回は2024年を占う記事に注目してご紹介します。

まずは日経新聞元日付け社説「分断回避に對話の努力を続けよう」です。以下記事を紹介します。

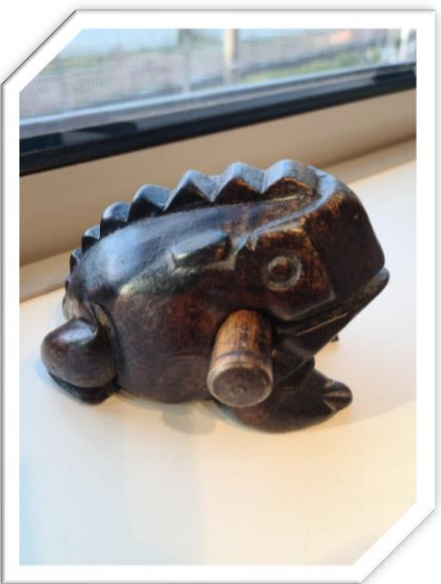
世界を見渡すと、ウクライナでの戦争の出口は見えず、イスラム組織ハマスのイスラエルへの越境攻撃で始まった紛争も年を越した。これらは、ある日突然、武力で平和な日常が破壊され戦闘が始まると、簡単に収拾できなくなる現実を世界に見せつけた。今年こそ2つの戦いが早く終わるように期待するが、さらなる戦火の広がりを防ぐことも重要だ。北朝鮮はミサイル開発を着々と進め、中国の軍備増強で東シナ海や南シナ海、台湾海峡での緊張は増している。こうした脅威には、日米同盟を基軸に日米韓が連携して抑止力を高める必要がある。しかし、際限のない軍拡競争につなげてはいけない。相互不信を取り除く外交努力も欠かせない。中国、ロシア、北朝鮮などの指導者が強い権力を持つ権威主義国家とは、首脳に直接こちらの主張を伝えるのが有効だろう。

分断は国家の間だけではない。民主主義の国のなかでも、貧富の格差や宗教、人種問題などで世論が分裂し、深刻な分断につながるリスクは高まっている。今年は1月の台湾総統選を皮切りに、3月ロシア大統領選、4月韓国国会選、11月米大統領選と多くの国で重要な選挙がある。民主主義は、選挙を公正に行い、その結果を国民が受け入れ、議会での対話によって問題を解決するのが基本だ。民主主義の国でも対話の必要性は増している。日本でも9月末には岸田首相の自民党総裁の任期が切れ、総裁選が予想される。足元では派閥の政治資金疑惑で国民の政治を見る目は厳しくなっている。与野党は真摯な話し合いによって信頼回復に努力してほしい。アパルトヘイト（人種隔離）政策をとった南アフリカで民族和解を進めた紛争解決の専門家のアダム・カヘン氏は「話し合いによって複雑な問題を解決できないことはよくあるが、たいていは私たちの話し方と聞き方が原因だ」と指摘する。むしろ、「難題解決にはよりオープンな話し方と聞き方を学ぶ必要がある」という。今年は国家、企業、個人の各レベルで対話を増やす年にしたい。銃や暴力ではなく話し合いで物事を解決する力を磨きたい。

もう一つは、1月12日付毎日新聞夕刊、2024生きてゆくあなたへ、から作家高村薫さんのインタビュー記事『「森」全体見えぬ時代』に「です。高村さんは「私たちは、木の細部はよく見えながら、森全体を全くつかめない時代を生きています。」「と言います。以下記事を紹介します。

どの国家にも優秀なスタッフがそろっているし、政治家や官僚が最悪の事態にブリーキをかけ、専門家も忠告する。どこかで理性が働くから戦争は回避できる。そう思っていたら、どうも世の中そうではないらしい。そのような非情な現実には私たちは気づいてしまった。情報はあふれかえっているのに、誰も全体を俯瞰することが難しくなっている。森が見えず木（情報）だけが見えてくる時代になった。民主主義を機能させ、社会を成熟させるには、まず国家や社会に軸がないといけない。戦争は避けるべきだとの前提に立つても、1960年代のベトナム戦争下の社会には民主主義と社会主義という二つの軸があったのでみんな集まった。市民には「世界はこうあるべきだ」との理想があり、学生運動を起こす軸もあったのでみんな集まった。しかし、今は市民が集まれる軸がない。ならば何を軸とすべきか。幸い私たちは今、戦争の当事者ではない。もちろん災禍に苦しむ人々がいるのは事実だ。しかし、この事実を感情だけで受け止めて終わるのではなく、どちらの側にもたえず、例えばこの戦争はなぜ起きたのか、今起きている事実は何なのか、この戦争はどう収束させるべきなのかを考える。それは、私たちが離れた場所にいる「他者」だからこそできることだ。今、私たちは世の中が分からなくなっているという事実を、冷静に理解することが大切だ。その上で公正で中庸であること。そして非当事者だからこそ極端にならず、フェアであることを軸にすべきではないか。今回の能登半島地震においても、スマホもある、情報も入る、しかし、政府も自治体も被害の全体像をつかめない。結局、情報が有機的につながっていないのだ。まさに森全体を捉える力が必要だ。

冒頭申し上げた通りの石川県は私の第2の故郷です。少しでも早い復興を望みますが、能登半島は過疎化がすすみ人口減少も進んでいた地域でした。東日本大震災の復興例もしっかりと検証しより持続可能な能登半島を再構築して欲しいです。都市部と過疎化が進む地域とが対立しないようしっかりと対話ができることを望みます。しかし、東京だけで能登半島の10倍近い人口を抱える関東で首都直下型地震が発生したら、はたして避難所は足りるのか、物資は足りるのか。過去の災害の全体像を誰が把握し対策をとっているのか。どうか。残念ですが政治資金問題ですら俯瞰し解決できない今の政府自民党に「森」全体を見る力があるとはとても思えません。



輪島の朝市で購入